

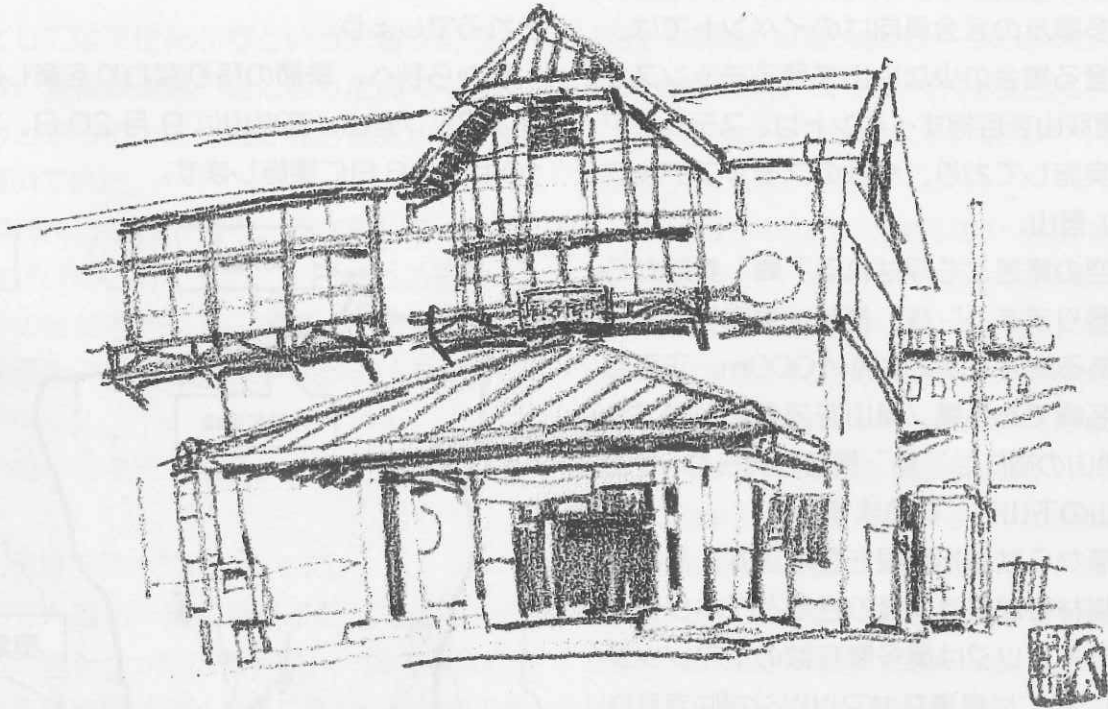
楽の世



奥多摩

《第46号》

平成29年7月15日
(一社)奥多摩観光協会



絵「奥多摩駅」 石山 久輔 (安寺沢本仁田山登山道入り口に在住)
現奥多摩駅は、昭和19年氷川駅として開業 昭和46年 奥多摩駅に改称した。
平成9年「関東の駅百選」に認定されている。

奥多摩観光協会 発展のために

平成29年4月1日付で奥多摩観光協会事務局長として着任いたしました。

奥多摩観光協会が一般社団法人として歩みはじめ、5年目の節目を迎える年ともなりますが、これまで皆様方から賜ったご協力とご理解、数々のご尽力がイベントの成功や事業の安定した展開につながり、多くの方々への質の高いサービスの提供を実現してきたものと心より感謝いたします。

さて、その節目となる今年度につきましては、現在実施している事業の定着及び現状把握による再構築等を行うとともに、奥多摩町長期総合計画にも掲げられている「住民が元気になる交流観光」「奥多摩ならではの地域産業」「観光・産業を推進する力」というキーワードをより具体化し、広く多くの方々に解りやすい、使いやすいサービスとして展開し、提供していくことに努めていきたいと

思っております。そのためには、近年の多様化する観光ニーズに対して、今ある奥多摩町の素晴らしい観光資源をより輝き魅力あるものに工夫することや、多くの方々にも目を留め関心を寄せていただくためのPR活動も欠かせないものと考えます。

また、今後も奥多摩町の観光事業を充実・発展させていく力に欠かすことのできない皆様のご意見や事業へのご提案につきましては職員一同、真摯に拝聴し実現に向け努めて参りたいと思っております。

今後ともご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

(一社)奥多摩観光協会 事務局長 川俣 哲也

～とっておきの山歩き:高丸山～

『高丸山』は雲取山からの主稜線、石尾根の途中にあるピークです。

石尾根を縦走する登山者の方は多いです。しかし高丸山には巻道があるため、高丸山のピークを踏む登山者は少ないです。そのため静かな山登りをするにはうってつけの山です。

今年の奥多摩友の会会員向けのイベントでは、そういった登る機会の少ない山に登るチャンスがあります。雲取山を目指すイベントは、ステップアップ形式で実施しており、今秋のステップアップは「高丸山」登山。

最初に天空の集落とも呼ばれる”峰”集落から赤指尾根を登ります。”峰”集落は東京都で一番高い場所にある集落で標高は約 1000m。正面には奥多摩の名峰である鷹ノ巣山を望むことができます。鷹ノ巣山の裾には”奥”集落が見られ、今回の高丸山登山の下山口になります。

“峰”集落からは赤指尾根を登ります。赤指尾根は静かな樹林帯が続き、登りきると千本ツツジに出ます。千本ツツジは奥多摩有数のヤマツツジの名所、6月ころには見事なヤマツツジが咲き乱れます。千本ツツジからは石尾根の代名詞ともいえる防火帯を歩きます。

防火帯は開放的な登山道が続きます。そして日当たりも良いため、様々な花を見ることができます。9月の山行ではアザミの仲間やウメバチソウ、アキノキリンソウなどの花々を見ることができるでしょう。また標高が高いため、うっすら色づきが始まったカエデも見られるかもしれません。

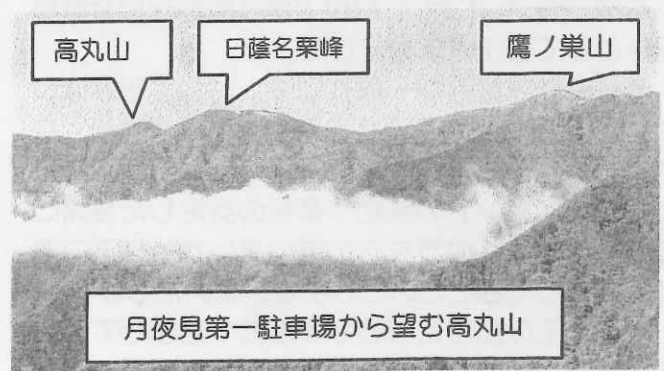
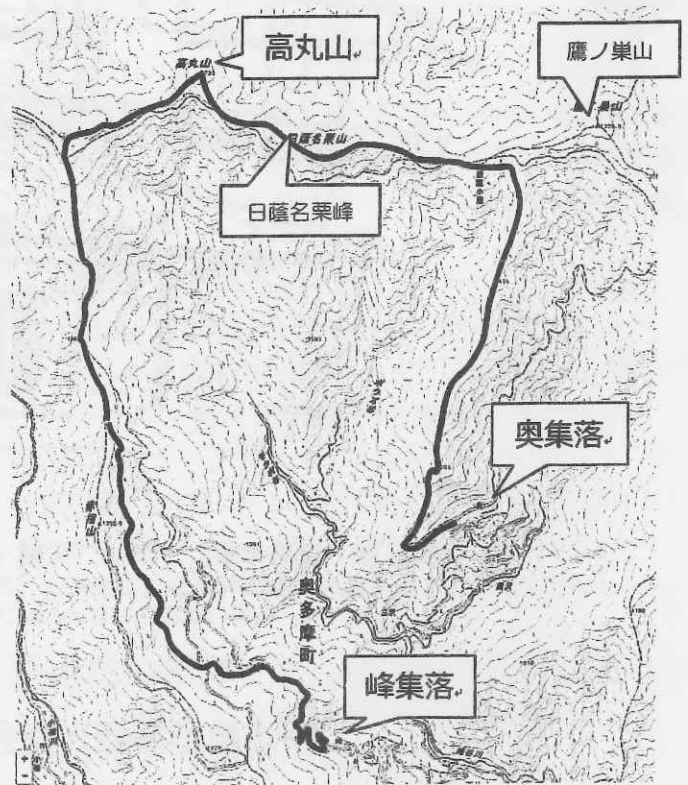
高丸山はお椀を引っくり返したような丸い形が特徴的です。そのため山頂付近はやや急登、その急登を登りきると高丸山の山頂です。現在山頂での展望はありませんが、かつては天祖山を望めたそうです。高丸山は鳥居(井)山とも呼ばれ、天祖山を遥拝する関係から鳥居がありました。現在はその名残もありませんが、昭和の初期のころには朽ちた鳥居が残っていたそうです。

高丸山からは日蔭名栗峰(山)へ向かいます。この主稜線である石尾根は、七ツ石山や六ツ石山など、「石」に関連する名前の山が多くありますが、日蔭名栗峰の「栗」のグリは石を意味する古語であると

いられています。

日蔭名栗峰を下り、避難小屋を過ぎると浅間尾根を通り”奥”集落へ向かいます。避難小屋の標高は約 1550m、奥集落の標高は約 1000m、標高差が大きく、初秋を思わせる避難小屋付近と晩夏の奥集落で木々の葉の色など、季節の違いを感じられるでしょう。

夏から秋へ、季節の移り変わりを楽しめるステップアップ登山、高丸山は 9月 20日、雲取山は 10月 5～6日に実施します。



月夜見第一駐車場は石尾根を望むビュースポットです。この駐車場は奥多摩周遊道路の途中にあり、ドライブの途中に山々の景色を楽しむことができます。

(矢作 佑允)

～行って来たあよ～

雪の奥多摩むかしみち

ボクは奥多摩むかしみちを歩いた翌日の土曜日に、市役所主催の「八王子名勝志を歩く」に参加し、帰路駅前の書店でトンボ出版の「写真でわかるシダ図鑑」を買った。

11月としては半世紀ぶりという大雪が前日この地に降り、青梅鉄道は不通になったので中止になるだろうと思っていた。だが翌日目覚めると初冬の陽が輝いていた。

針葉樹の枝々には雪が残り、陽が射してくるとボクの眼はまばゆいのだった。イロハカエデは3本とも盛りの紅葉を見せる。ボクは雪の積もった遠くの峰を眺め、アルベルト・アインシュタインの言葉を浮かべた。

「誰かのために生きてこそ、人生には価値がある・・・」

またこの風景を眺めて思ったのだ。

八木重吉さんなら一編の詩をうたっただろう。玉堂氏なら絵筆をとっただろうか。一編の小説に、であればさて誰に書いていただこうか。やはり「草にすわる」の白石一文^{※1}さんである。

「・・・これまで、誰のことも真剣に同情できず、誰のことも深く哀れむことができず、誰の力にも本気でなろうとしなかったから、・・・」という白石さんの文章は、この風景の中で、ピンピンとボクの胸を打っていたのだった。

肥沼信次^{※2}は若い頃からアインシュタインを崇拜していたのだ。

湖面には湯気が立ち込めて、流氷がおしよせるように見えた。ボクの思いは湖にひき込まれそうだった。しばしの時はゆっくりと音も立てずに流れていたのだ。人生には同じ日など一日もない。ボクは気アラシを眺める一老人となって立ちつくしていた。

この頃シダ植物が気になっていたのだ。

^{しろいし かずみ}
※1白石 一文 1958年(昭和34年)福岡県生まれの作家。

^{こえぬま のぶつぐ}
※2肥沼 信次 八王子の野口英二

(会員 荒井 直美)

青梅市成木の桃源郷と小曾木立川断層

4月8日、お釈迦さまの誕生をお祝いする「花まつり」の日。東青梅駅北口集合後、バスで成木市民センターまで移動して、街道を成木川の下流に向かって歩く。川の左岸に立派なシナノキがあり、木の分類学的な説明とお釈迦様との関係、そして別のガイドから木の用材としての機能とそれに伴う地名・人名との関係等の説明があった。一つの樹木で、切口を変えたお二人の説明を聞いていると、とても面白い。

道路わき、家の庭、畑等に植えられた花々が、次々と私たちに歓迎してくれる。

成木小学校から左折して安楽寺通りへ入る。途中、広場に一本の山桜が堂々とした、見ごたえのある姿を醸し出している。スミレの見ごろの時期。普通この辺に見られるコスミレの色は青なのに桃色を帯びたものが見られた。以前地主さんに、本スミレを別の場所に移植したら青に戻ったと聞いた。アブラチャンとダンコウバイの違いの説明があり、その後、朝鮮半島原産の、植栽された見慣れぬケイジョウスミレが目をついた。

やがて長蔵寺へ到着。この寺で栽培しているヤマアジサイに似た木からつくったアマチャをご馳走になった後、ガイド命名の“成木高原”を経て安楽寺へ向かう。“成木高原”は、展望がよく、さわやかで、時期を変えてレンギョウ、シダレザクラ、ハナモモ、コブシ等々が次々に咲く素晴らしい場所。成木の人の花を慈しむ気持ちを感じることができる。

安楽寺は真言宗で、奈良時代に開設されたとの説がある名刹。お寺では、威風堂々の杉の木やシキミの大木、ヤブツバキ、シダレザクラが。またお寺周辺に植栽された桃の花の林は、まさに桃源郷で、毎年来ずにはいられない場所である。

安楽寺で昼食後、バスで岩蔵温泉バス停へ。ここから東京炭鉱跡への途中では、見ごたえのあるシモクレンが好評であった。昭和10年～35年までメタセコイアからできた亜炭を採掘した空洞が地下に広がっている場所で、バス停の名前も“東京炭鉱前”である。

その後、硅石からなる岩蔵の大岩へ。産業総合研究所ではここを立川断層の一部とみなして、地震に伴う動きを把握すべくセンサーを埋めてあった。この付近から北西部に延びている断層が名栗断層、そして立川断層はここを北側始点として、南東へ延びている。なお、名栗断層と立川断層を併せて立川断層帯と呼ぶ。大岩には大きな“ふせぎの草履”が下がっていた。ついでに、これが地震を防ぐおまじないにもなってくれたら更に良いと思いつつ、「花まつりの一日」を堪能し、青梅線河辺駅で解散した。

(本渡 康隆)

3月21日奥多摩は朝から冷たい雨が降っていた。Aさん70歳は64歳の女性と2人奥多摩駅からバスで日原鍾乳洞まで来た。Aさんは超ベテランの登山家。奥多摩の山にも精通していた。

登山計画書によると、一石山神社からウトウの頭、長沢背稜から酉谷山に登り七跳尾根を下り小川谷林道を日原までのコースになっていた。(小川谷林道は通行止めになっています)

3月23日朝8時30分ごろAさんの家族から「奥多摩の山に行ったきり帰ってこない」と警察に連絡があった。21日低地は雨だったが、1000m以上の山は雪となり、膝ぐらいまでの積雪があった。

酉谷山の避難小屋に設置してあるノートに22日に泊まったKさんの日記が記されていた。

「2017.3.22 雪がすごい。ヨコスズ尾根～一杯水避難小屋～・・・～酉谷山～酉谷山避難小屋 明日は水松山まで行ってからタワ尾根」22日、日原からヨコスズ尾根、長沢背稜を酉谷山に登り避難小屋に泊まったのでしょ。

3月25日午後1時ごろ女性を発見。発見時女性は精神興奮状態で言葉も支離滅裂であった。それでもAさんのことを心配していた。Aさんはその後、悪谷(割谷)で水に浸かった状態で発見され、洋服を脱いだ低体温症独特の様子だった。低体温症になると軽い場合は全身の震え、呼吸が早くなったり、手足の血管が収縮して冷たく蒼白になる。さらに体温が下がると、震えが止まり筋肉が硬直し始める。また、錯乱し、服を脱ぎ棄てたり、意味不明の言葉を話し、呼びかけても反応しなくなる。そして死に至る。まさにAさんはそのような状態で発見されたのだ。

Aさんは朝から体調不良で、長沢背稜に出た辺りから、雪が深くなり、やむなく、そこでビバークした。22日天気は回復し長沢背稜を酉谷山の避難小屋に着いた。そして下山ルートの変更して坊主山の巻き道から石楠花尾根を三叉橋へ下ることにした。しかし、疲れと雪により精神的に追い込まれたのか、すでにこの時には低体温症に

なっていたと思われ、正常な判断が出来ていなかった。そして道を外れて悪谷(割谷)方面に迷い込んでしまった。ここで22日、23日再びビバークした。24日Aさんは救助を求めに、さらに尾根を下った。女性は24日単独でビバーク、25日救助のヘリコプターが見えたので手を振ったり大声を出したが気が付いてもらえなかった。そこで尾根を再び坊主山方面に登り始め、午後1時ごろ山岳救助隊により発見された。女性は精神的に不安定であったが、歩くことはできた。その後Aさんを見、意識はなかった。

ベテラン登山家であるがために起きた事故といえるのではないだろうか?もし一杯水へのコースをとっていたら、ヨコスズから酉谷山コースを22日に歩いていたKさんと会っていたでしょう。奥多摩をよく知っていたため、地図にない石楠花尾根を最短コースとして下ってしまった。そのため発見が遅れてしまいました。



山での遭難回避の3大原則

(<http://middleagetozan.com/>ホームページより)

- ① 自分(たち)の能力を過小評価する
- ② 危険を予測する
- ③ 金で買える安全は買う

衰え行く体力というものは、かななか自覚できないものです。常に自分たちの実力を過小評価して、計画を立てるようにしましょう。また、常に頭の片隅に『ここにはどんな危険がありうるか』を予測しましょう。

気合と体力でしのげるのは、若いうちだけです。もう若くない我々は、金で買える安全なら積極的に買いましょう。

(小峰 一郎)

奥多摩樹木雑考

～森の中のうごめき～

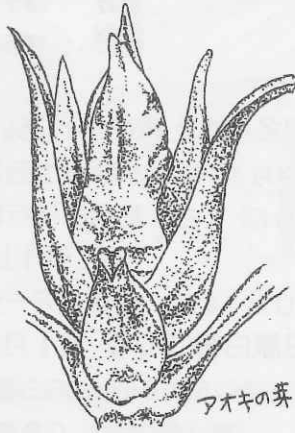
奥多摩むかしみちの夏は、みちに沿ってウツギ、マルバウツギ、コゴメウツギなどの低木が、純白の可憐な小さい花を沢山つけることからはじまります。斜面の森ではコナラ、カエデ、ケヤキ、アカメガシワなどをはじめとして、多様な落葉樹が、日の光をうばい合うように緑葉をふるわせています。伸びやかな落葉樹の下では、アオキが濃緑色の枝葉を繁らせて群生しています。アオキの存在は、今眼前に広がる落葉樹の森にこのまま手を加えなければ、ゆくゆくは常緑樹の森に移りゆくとのサインなのです。

みちを歩いていくと、時折、暗い雰囲気がある森の下の方に広がっているのに気がつきます。見ると、シラカシ、ウラジロガシ、ヤブツバキ、イヌガヤなどの常緑樹の若い木が生長してきています。しかし、私がかつて浜離宮の森で見たタブノキ、小石川植物園の森で見たスタジイのすがたは見あたりません。まさに奥多摩の森を感じます。(小丹波で見られる何本かのタブノキ<イヌクス>の巨樹は、自然に生えたものでなく、植栽されたものです)。

カシ、シイなど常緑樹の多くは、よく日の当たる森の林床では、実生はストレスをおこし生長が鈍ります。生長の速い落葉樹の葉が繁り、林床や林間に日陰ができるようになると、標高が低い暖かい森では、常緑樹はゆっくり生長を始め、日照をたくさん欲求する落葉樹を圧倒しながら、少しずつ常緑樹の優勢な森を形づくっていきます。

森の中でも見られる植物の共存と競争は紙一重なのです。

(橋上 一彦)



アオキの芽

奥多摩の野鳥

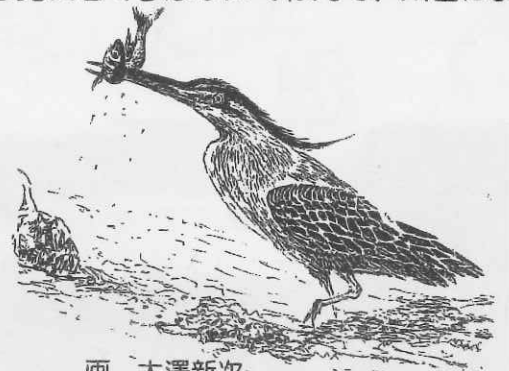
～ルアー釣りをする鳥～

今回はササゴイをとり上げました。

ササゴイ：サギ科、全長52センチ、体重300gくらい。全身やや青味のある灰色で虹彩は黄色で紺色の長い冠羽があります。足は黄色、世界中の温帯、熱帯地域に生息しています。(ヨーロッパ、北アメリカを除く)日本では夏鳥で本州、四国、九州などで繁殖します。

巣は樹上に枝を積み重ねて造り河畔林が多いが、市街地にある大木で集団営巣する場合もあるようです。コサギ、ダイサギなどサギ類と同様に浅い水辺で待っていて魚を捕まえて食べます。名前の由来は光沢があって白い縁取りのある羽が体に出るのでこの羽を笹に見立てて、ササゴイの名がついたようです。

ササゴイは、鳥類界きっての釣り名人で、川の上を飛んでいる昆虫をくちばしにくわえて、川面にまいて魚をおびきよせたり、葉や小枝を川面に落とし、魚をおびき寄せ捕食したり、生餌釣りだけでなくルアー釣りをする、おもしろい習性をもった鳥です。



画 大澤新次

同じサギ科でゴイサギという鳥がいますがこの鳥は留鳥で冠羽は白く虹彩は赤い。ササゴイと同様にルアー釣りはするのでしょうか？

いずれにしても釣りをするササゴイが、奥多摩を流れる日原川や多摩川、そしてその支流などで、運がよければ見る事が出来るかも知れません。

(畑 幸夫)

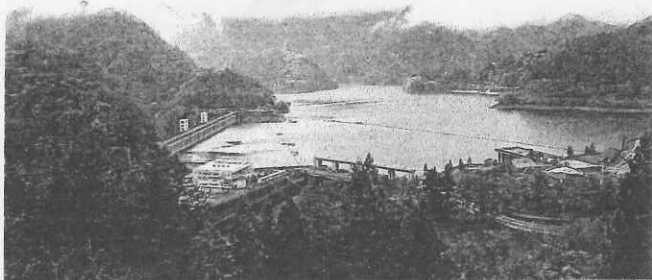
夏から秋 奥多摩山歩き
～ イベント案内 8月から10月～

<イベント案内>

- No.17 9月15日(土) 山里歩き(倉沢のヒノキ)
No.18 9月20日(水) 高丸山(ステップ雲取山)
No.19 10月5、6日(金) 雲取山 第2回
No.20 10月18日(水) 奥多摩版フットパス(海沢)
No.21 10月27日(金) 三ノ木戸・城の集落跡
No.22 10月31日(火) 御前山(紅葉の奥多摩三山)

イベントについての詳細は、奥多摩町観光案内所までお問い合わせください。

今年は奥多摩湖(小河内ダム)完成から60年になります。湖底に水没した小河内村、山梨県の丹波山村、小菅村の945世帯、約6000人の移転と建設中に殉職した87名の尊い犠牲の下、青々と水をたたえ東京都内への水の供給を支え、またその美しい姿は観光客を楽しませています。



昭和6年5月小河内ダム建設に関する説明が当時の村長小沢市平氏にあった。村民は反対に立ちあがった。しかし9月に起きた満州事変が契機となり、同村議会はダム建設を受け入れた。その時の小沢村長は「軍役に服して、敵弾を噛(か)み、天皇陛下万歳を叫んで、名誉の戦死を遂げるのも国の為だ。人生片時も無きを許さない水の問題で、然も天皇の住む皇居のある東京市が要する水だ。幾百万の生命を衛る水だ。これがために犠牲にならうとするのだ。将兵の国に尽くすも、我々の社会公共に尽くすのも、道は異なるが、国に尽くし、世を救うのは道皆一つなりである。社会は共存共栄だ。出来ることはだれでもやる。出来ないことを世の中の為にするのが、本当に社会に尽くすことになる。」と云って村議を説得したそうです。「湖底の村の記録」奥多摩湖愛護会

奥多摩地域情報局

奥多摩夏祭り情報

- 8月 5日 海沢 山祇神社 神庭の神楽
6日 海沢神社 獅子舞 (寿楽荘、体験農園広場)
12,13日 奥氷川神社 獅子舞 (12日 奥多摩花火大会)
南氷川のお囃子
16日 境 白髭神社 獅子舞 (神社後、境集会所広場)
20日 鳩ノ巣 熊野神社 獅子舞
白丸 元栖神社 獅子舞
27日 大丹波 青木神社 獅子舞
小留浦 山祇神社 獅子舞
栃久保 根元神社 獅子舞
9月 3日 日原 一石山神社 獅子舞
10日 小河内 原 獅子舞 (小河内神社、ふれあい館)
川野 獅子舞 (小河内神社、ふれあい館)
崎沢 鹿島踊り (小河内神社、ふれあい館)

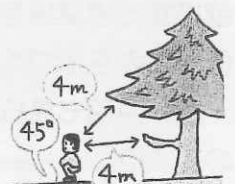


奥多摩水と緑のふれあい館

- 9月10日 水源郷土芸能フェスティバル
10月1日 都民の日行事として、小河内ダムに関するビデオ上映ほか東京水プレゼント
10月14日 ヘブンアーティスト公演
日原白箸づくり 11月まで第3土曜日に開催します。
日原に伝わる伝統的な白箸を、作ってみませんか。
(問い合わせは 日原森林館 ☎ 0428(83)3300)

夏は雷の季節です。特に登山中に予兆を感じたら、安全な山小屋や下山ルートを考えましょう。

しかし、もう間に合わないと思ったら出来るだけ低い場所に一点接地します。二点接地すると電流の入り口と出口が作られるため危険です。また大きな木の下で雨宿りを考えますが、雷はより高いところ、突起したところに好んで落ちます。木に落ちた場合「側撃」といってより水分の多い人の方に向かってきます。雷は1時間もすれば通りすぎます。それまでじっとがまん、がまん。



次号発行予定：平成29年10月15日

発行 一般社団法人 奥多摩観光協会
住所 〒198-0212 奥多摩町氷川210
電話 0428-83-2152 FAX 0428-83-2789
編集 名人・達人観光ガイドの会
hppt://www.okutama.gr.jp/